

1. 外構植栽の灌水方法

灌水方法には、散水ホースによる手撒きの灌水、芝生地に使用さえる移動式スプリンクラーによる手動灌水、点滴パイプを敷設して開閉を手動で行う方法、点滴パイプを敷設して自動灌水装置を使用した方法などがある。

植栽当初、活着までの間は水やりは十分行うことが必要であるが、その後、水やりを軽減して植物を乾燥に耐えられるようにするのが望ましい。一般の緑地で自動灌水装置を使用した灌水を行うと、樹木の根が水を求めて深く入ることをせず乾燥に弱くなってしまい、自動灌水がトラブルと枯れる危険性が高くなるのと、水道料金、設備機器の点検などが必要となる。

一般の外構植栽の灌水方法は、手撒き灌水と手動灌水の併用が適している。外構植栽地で人工地盤となっている場所は自動灌水も検討する。

2. 灌水方法での留意事項

- ① 散水ホースの長さが20m前後を考慮し、散水栓の配置は30mピッチを基準とし、道路の渡りなどに支障のないように、散水栓を配置する。
- ② 散水栓は清掃と手撒き散水にも使用できるものとする。
- ③ 建物の関係で、植栽基盤の下にコンクリート基礎が敷設されるような植栽地では点滴パイプを敷設する。
- ④ 緑地に点滴パイプを敷設し、必要に応じて散水栓に接続して手動による灌水が望ましい。点滴パイプは埋設しない。
- ⑤ 人工地盤の場合と屋根がかかっている部分は自動灌水装置を設置することを基本とする。
- ⑥ 雨水タンクの設置など環境に配慮する。



・立型散水栓ボックス



・立柱散水栓と雨水タンク

3. 自動灌水設備による灌水での留意事項

- ① 屋上緑化、人工地盤の植栽では点滴パイプを使用した、雨水センサーとタイマー連動自動灌水とする。
- ② 電磁弁 BOX とコントローラ BOX を適切な場所に設置する。
- ③ 点滴パイプの配置の間隔は60cmで、ドリッパー(ドリップホースの穴)の間隔は30cmとする。
- ④ 点滴パイプは基本的に地中に埋設しない。
- ⑤ 灌水量は植物によって異なるが、一般的な1回の灌水量は7~10mm。
- ⑥ 設備工事として電源と給水管を設置。圧力は1.0~2.0 kg/cm²とし、場合によっては減圧弁を設ける。電源は一般電源の使用を基本とする。漏電対策として制御盤の電源には漏電遮断機を設ける。冬季に配管内の水の凍結防止として水抜き弁(オートドレンバルブ)を設置する。